

残っていない毎日。夕方帰ってきたらまた食べさせねばならない。ああ今日は何とか生きた。一家心中一日延びたの思い。

米沢の実母が私の健康を心配して一升くらいの米を持ってきて「お前が食べるように。」と言う。けれど私は残らず子供にだけ食べさせた。

子供達も頑張った。

長男は山形東高校に通った。卒業を前にして大部分が大学に進まれた。長男は悩み続けた末、「僕は社会大学に進学を決めた。」と銀行に就職を希望した。

面接テストの日の前日、担任の先生から「明日は下駄でなく靴をはき国防色の作業服でなく黒の学生服を着ていくように……。」との連絡を受けた。しかし新調出来るわけではない。友人のを借りて出掛け、おかげさまで無事採用通知をいただいたのである。

あの戦争が奪った私の希望と夢

山形県 大江 徳明

満州開拓に希望を抱いたのは二十八歳の春だった。私は下駄屋の次男として生まれたがあゝ頃商売は順調だった。しかし、大東亜戦争もたけなわとなり、商品も品不足となり、問屋から思うように仕入れることが出来なくなってきた。

そんなとき、村役場で満州開拓の募集がありそれに応募した。昭和十八年四月、吉林省磐石県板楸河開拓団に入植、九月には内地へ嫁賃いに帰省、妻を連れて帰った。明けて十九年の春を迎え馴れない農作業に懸命に励んだ。妻と二人で将来の希望を抱いて頑張った。その甲斐あって秋には素晴らしい収穫を見ることが出来てとても嬉しかった。その上、可愛い子供も生まれ、十九年は最良の年であった。

それも束の間、二十年五月三日、召集令状が突然やっ

てきた。吉林の部隊に入隊、三か月間の軍事訓練が始まった。毎日の訓練はとてまきつかった。三か月の訓練も終わったので、家へ帰れると思って喜んでいたのも束の間、八月中頃に、ソ連国境近くの東寧という町の警備の任につけられた。毎日のようにソ連軍の戦車と戦闘機の大襲撃におそわれ、命からがら山頂の第一陣地に立てこもり戦闘を続け、どうやら逃げのび、やがて辿りついた所は鮮人部落だった。そこで初めて日本の敗戦を知らされた。そこにはソ連軍が待ち構えていた。二十人の戦友たちは勿論、その他三百人もの兵士たちが捕虜となってしまう。森林鉄道に乗せられシベリアに連行され、山奥に降ろされた。着くや否や早速森林の伐採や運搬などのとても辛い作業で奴隷のような労働を強いられた。食事といえば毎日黒パン五十グラムにスープ少々、これでは栄養失調になり死んでいくのではないかと思っただ。こんな食事と過酷な労働により体力も衰え数多くの死傷者が続出した。亡くなった人は丸裸のまま土葬された。私達はその土葬の手伝いを命ぜられ、胸が張り裂ける思いだった。

明けて二十二年の春になり、アポーロ病院へ戦友とともに勤めることになった。仕事は患者の衣類の洗濯で六か月間勤めた。病院での食事はこれまでと違い、白米と肉入りスープで私達は少しずつ身体が丈夫になり元気づいてきた。

昭和二十二年十一月、待ちに待った懐かしい日本への引き揚げだ。ナオトカから出港し、函館へ上陸する。そこで現金二百円、乾パン二袋をいただき五年ぶりに生まれ故郷の山形へ帰った。

早く妻に逢いたい。子供も大きくなっていることだろうとそればかり願っていた。妻は私より一年早く満州から引き揚げてきていた。

そして、妻は北海道開拓へ行き、私の帰ってくる日を待っていてくれた。夢にまで見た子供はすでに死亡していた。私はこのときほど、戦争が憎いと思ったことはない。しかしどうすることも出来ずあきらめるよりほかなかった。

妻から終戦当時のことを色々聞かされた。妻は乳飲み子を抱え、暴動に巻き込まれたり、ソ連軍に追いまわさ

れるので、身を守るため頭の髪を剃り丸坊主になり、男装をして身を隠し、死に物狂いで逃げ廻り、生き延びてきたとのことだった。当時のあの苦労は書き表せるものではない。これからも戦争は絶対にしないで欲しい。

四十七年前、結婚したときは、満州の広野で開拓をし、頑張って幸福にしてあげると約束し連れて行ったのに私は妻を裏切ってしまったことになる。開拓で得た財産と、子供を戦争に奪われてしまったことはとても残念であり無念である。

私は妻の待っている北海道開拓に希望を抱き、十勝郡の足寄地区の柏倉開拓団に入り妻と二人で大森林を伐採して抜根、一畝々々掘り起こして開墾し、十五年間畑作営農を続けて暮してきた。満州開拓とは違い並大抵の苦労ではなかった。秋の稔り頃には鹿が出てきて、丹精こめて作った作物が荒らされ、夜は時折り熊が部落に降りてきては、羊や豚を抱えて持っていかれたこともあった。恐ろしさで何時もびくびくしその不安が続いた。そこで私は三十六年の春三月、見切りをつけ、柏倉開拓団を離農することを決心した。妻と女の子二人を連れて山

形へ帰り、妻と共に会社勤めをして生計を立て三人の子供を育てあげた。娘たちはそれぞれ結婚し、孫も出来たが、私の人生は苦労の連続だった。しかし人間は苦労してこそ、初めて幸福を知ることが出来るんだなとつくづく感じている七十五歳の人生である。

ああ、父よ母よ満州よ

大阪府 西岡 智恵子

一九二七年、大連市満鉄社宅で出生。

三三年四月、大連霞小学校へ入学（新設校）三四年八月、満州国奉天敷島小学校へ転校。父が新生満州国に招へいされて転職のため、三六年八月、旅順師範学校付属小学校へ転校。四四年九月、旅順満州第七七部隊へ軍属として勤め始めた。

徴兵年齢引上げのため、学校の街だった新市街から学生の姿が減り、中学生も動員されて、周水子などの工場で働かされるようになった。街はガランとした感じにな